

弟急逝 1週間気付かず悔い

孤独死 LINEで阻止

独り暮らしをしていた弟が孤独死したのを機に、東京都江戸川区の紺野功さん(60)が開発した見守りサービスの利用がじわりと広がっている。無料通信アプリ「LINE(ライン)」を使い、メッセージに対する返信の有無で利用者の安否を確認する。導入から約1年で約900人が登録し、兵庫県内でも約30人が利用する。紺野さんは「孤独死を防ぐのは難しくても、早期発見につながればうれしい」と話す。

(田中宏樹)

サービス希望する人「だち」に登録し、安否確認は、NPO法人エンリッチを受信する頻度を設定。送(東京都)のホームページから同法人をラインの「友面」で「OK」をタップし、



エンリッチが運営する見守りサービスを説明する
紺野功さん(東京都)

返信の有無で安否確認

仕組み開発 1年で900人登録

定期的にメッセージが送られる
エンリッチのサービス

<今日の名言>
人生という試合で最も重要なのは、
休憩時間の得点である。

---ナポレオン・ボナパルト---

2019年12月27日の安否確認

安否確認です。お元気ですか？
下の[OK]をタップしてください。

OK

既読
9:12

ご連絡ありがとうございます。
次回は3日後の9時に安否確認の連絡
をさせていただきます。
配信間隔の変更は、マイページから
設定可能です。

安否を伝える。24時間以内
に返信がなければメッセー
ジが再送信され、さらに反
応がなければ事前に登録し
た本人や家族らの連絡先に
電話がかかる。



紺野さんの弟田中さんは2015年2月、都内のマンションの自室で死後約1週間たつて発見された。51歳だった。部屋に暖房器具はなく死因は低体温症とされた。腐敗は進んでいなかったが、警察官から「何らかの原因で倒れた後、少し生きていたかもしれない」と伝えられた。

由夫さんは自宅を拠点に自営でソフトウェアの開発やメンテナンスを手掛けていた。死後に部屋を訪ねると、パソコンのモニターが何台も置かれ、仕事の足元には焼酎のボトルが残っていた。寝室は布団が敷きっぱなしで雑誌や段ボールが積み重なっていた。

「私は家庭を持ち、弟は独身。普段はあまり連絡も取らなくてね。家族でもそ

うやって縁遠くなってる人って多いと思うんです」。紺野さんが声を落とし、続けた。「でも、警察官の言葉を聞いて『早く気付けば助けられていたかもしれない』と思いましたね」

役員を務めていた携帯ゲーム会社を退職し、18年9月にエンリッチを設立。同年11月から見守りサービスを無料で展開する。登録者は東京都や神奈川、大阪などの都市部が中心で、40〜50代が65%を占める。

兵庫県の50代女性は自身の経験を踏まえ、エンリッチに声を寄せた。女性の父親は急死して4日後に発見され、体の硬直により腕や足を折ってひつぎに入れたという。女性は「死そのもの以外に別の悲しみがあつた。死後何日も放置された後の処理を考えると、こういったサービスは必要だと思う」とした。

紺野さんは「弟のように倒れてから生きていた時間があるなら、少しでも助けられる命はあるかもしれない。遺体の腐敗を防ぐという面でも早い段階での発見につながりたい」と力を込めた。エンリッチ ☎050・3702・5355